

おてら

常例十六日講
毎月十六日午後一時より
お経練習・法話会

写経会
毎月第二・四金曜日
午後一時より

報恩講



親鸞聖人影像 安城御影副本
(西本願寺蔵・国宝)

十一月十六日(日)
午前十一時より

浄土真宗のご開祖親鸞聖人の御祥月命日に
「ご宗祖のご苦勞を偲び感謝し、そのみ教え
を味あわせていただき、明日の私の生きる
糧とさせていただく法要です。」

どうぞ一度ご参加下さい。

挫折

住職 蒲原 靈英

どんなに順風満帆に見える人でもどんな偉人でも、人間である以上、挫折をしたことが無い人はいないでしょう。似たような言葉で「失敗」がありますが、こちらは単に「結果の不達成」であり、「挫折」とは、その「失敗によって心が折れ、目標や生き方を修正せざるを得なくなること」だそうです。宗祖親鸞聖人も、その人生において幾度も大きな挫折を経験されました。聖人は、九歳で出家して比叡山で二十年もの間懸命に修行されましたが、いくら戒律を守っても煩惱を断ち切れず、「自力では悟れない」という絶望に至ります。これが最初の大きな挫折でした。しかし、この挫折があったからこそ、法然上人に出会い、「上人に騙されて地獄に堕ちても後悔しない」とまで思い定めて、阿弥陀如来の本願を信じ念仏する身となりました。そして、上人の教えを受け継いだ後には専修念仏が弾圧され、聖人は僧籍を奪われ越後へ流罪とされました。僧侶としても人間としても大きな挫折でした。しかし、越後の地で当寺にもお訪ねになる等様々な人々と交わり、「非僧非俗」という新しい生き方を模索されていきました。ここにもまた挫折を通じて新しい道が開かれていき、五年後ご赦免に至ったのです。

さらに、晩年の八十四歳の時には、帰洛後に関東に送った息子の善鸞が、阿弥陀如来の本願を歪め念仏のみ教えを曲げて広めた為、親子の縁を切るという苦渋の決断を下されました。「かなしきことなり」と繰り返し記されていることから、聖人にとつての人生最後の大きな挫折でした。しかし、この挫折を通じて、親子の情を超えてでも真実の信心を守るといふ厳しい姿勢を示されました。そして、その後も旺盛に著述活動を行い、「念仏申すほかに道はない」という確信を以て真実の信心を深められました。

このような挫折の度に、聖人は自力の無力さを痛感し、やはり自分ではどうしてみようもない私だからこそ、阿弥陀様が救いの「おめあて」としてくださるのだから、すべて阿弥陀様「他力」にお任せさせていただくしかないのだとの信心を益々深められていったのだと思います。挫折を味わうということは、自分の限界を思い知らされるといふ非常に辛いことですが、これも大いなる阿弥陀様の「おはからい」なのだと思います。ちょっと見方を変えながらやれることを一生懸命やってみると、不思議とまたそこから良い縁が結ばれることもあります。言わば挫折も「阿弥陀様からの賜り物」として、有り難く頂戴させていただけると良いのかもしれない。合掌

要法経代永総



九月二十日から二十六日までの秋彼岸中二十日午後七時から、この一年間に永代経をご進納くださった方々をご招待し、総永代経法要が営まれました。献灯・献花・献供物の後に読経が始まり、参拝者の方々が順次ご焼香。御文章拝読の後、住職よりご法話があり、本山御用達のお供物（亀屋陸奥「松風」）と記念品が下付されました。

永代経は、永代にわたり仏を供養し、み教えが伝わってゆくようにと、できる人ができる時にできる事をさせていただく、相互扶助・お互い様の精神をもって受け継がれて来ました。今日では、ご本山で災害復興支援等に役立たせていただき、昨年の能登半島地震でも、ご本山から被災されたお檀家の方々に御見舞金をいただきました。

『教行信証』が生まれるまで 5

本願寺第三代覚如上人がまとめた親鸞聖人の伝記『御伝鈔』によると、聖人の父は「皇太后宮大進有範」とされています。皇太后宮は皇太后の日常についての事務を担当する役職で、大進はその第三番目のポストです。ところが、治承五年（一一八二）に九歳で出家された聖人を連れられるのは、有範の兄にあたる日野範綱でした。『御伝鈔』では範綱のことを「義父」と記されており、聖人は伯父範綱から養育を受けておられたようなので、聖人は九歳になるまでに父の下を離れておられたこととなります。また、第八代蓮如上人の十男の実悟によってまとめられてた「日野一流系図」によると、聖人の四人の弟の内二人についても範綱の子になっており、聖人を含めた有範の五人の子供は全て出家して仏門に入っています。つまり、有範は幼少の子供達を自身の下で養育できなくなっていたのです。このようなことから、以前は有範が早く亡くなったとも考えられていました。ところが、父の中陰に際し聖人の弟の兼有が返り点や送り仮名を施した『無量寿経』の写しが、現在も本願寺に残されています。このことから、有範が亡くなった時、既に兼有が『無量寿経』の内容を理解できるだけの知識を身に付けていたことが分かり、子供達がある程度の年齢に達していたこととなります。

さらに、「日野一流系図」では有範について、出家して三室戸大進と名乗ったとされています。三室戸とは、日野の地よりやや南の三室戸寺（宇治市）周辺の所です。聖人が幼少時に、有範は朝廷の役職を辞して出家し、都から離れた三室戸寺で隠遁生活を送っていたようです。なぜ、聖人が出家する以前に皇太后宮大進という役職を辞していたのでしょうか。この時期の皇太后とは、後白河法皇の後・藤原忻子です。後白河法皇はこの頃、実権を握った平清盛によって鳥羽殿（京都市伏見区）に幽閉されたり、京都から福原（神戸市）に連れ出されたりと厳しい状況でした。このような中で、皇太后に仕えていた有範も地位が不安定となり、役職を辞さなければならなくなっていたのでしょう。

（本願寺新報より一部修正転載）

月忌納め法要

（おみがき）

十二月十六日

午後一時より

仏様ご先祖様に一年の感謝を

申し上げます

除夜会法要

十二月三十一日

午後十一時半より

除夜の鐘を

ついてみませんか

豚汁の振る舞いがあります

